

第 52 回若手研究者・院生情報交換会 報告

テーマ：実証調査のデザインから分析までのプロセス展開

—新型コロナ中での困難と工夫—

開催日時：2023 年 1 月 14 日（土）14：00－17：45

会場：同志社大学新町キャンパス 溪水館 1 階会議室

報告者：楊慧敏（同志社大学大学院社会学研究科外国人留学生助手）

今回、2023 年 1 月 14 日（土）の 14：00－17：45 の約 4 時間にわたり、対面において第 52 回若手研究者・院生情報交換会が開催された。テーマは、「実証調査のデザインから分析までのプロセス展開—新型コロナ中での困難と工夫—」である。参加者は、31 名であった。

大会は、関西社会福祉学会・日本社会福祉学会関西地域ブロック担当理事の所めぐみ氏（関西大学）の開会挨拶から始まった。その後、基調講演は立木茂雄氏（同志社大学）より「実証調査研の基本戦略と実践：福祉防災学研究を一例として」というテーマで行われた。立木氏は、なぜ実証調査が必要なのかを理論的に示したうえで、長年継続して行われてきた福祉防災学の実践研究を提示しながら実証調査のプロセスを語った。福祉防災学の固有視点として、①生活の復興、②生活の全体性、③平時と災時の生活の連続性、④衡平性、⑤協働性、⑥全体性・連続性・衡平性・協働性の社会実装の 6 つを挙げながら、4 つ目まで詳しく紹介した。被災者または災害のデータを対象とした調査、分析を通して、①生活の復興を図るには住まいやつながりが重要で、③平時と災時の生活の連続性を担保することは②生活の全体性につながり、④衡平性（相対的平等）を実現するには合理的配慮が必要だと述べた。

続いて、3 名の若手研究者・院生にそれぞれの研究および実証調査の経験についてのエピソードを報告していただいた。

姜民護氏（同志社大学）は、「ソーシャルワーク実習教育によるインパクトの検証」をテーマとして報告した。姜氏は、すでに行われた文献研究や専門家による定性的・定量的な内容的妥当性の検討を通じて開発した、ソーシャルワーク実習教育に関する評価尺度に基づいた実施最中の量的調査の概要と困難点を語った。調査は、ソーシャルワーク実習教育に関する、評価尺度の構成概念妥当性および概念間の因果関係の検討に関するものである。20 校の 4 年制大学においてソーシャルワーク実習教育を受けた 300 名にアンケート調査用紙を配布した。アンケート調査を実施するにあたって、質問項目の妥当性はもちろん、いかにして調査参加への匿名性や任意性を保障しながら、参加率を高めていくかといった困難点が挙げられた。

松下茉那氏（神戸大学）の報告題名は、「コロナ禍における調査の経験について—韓国の社会的不利地域ソウル市チョッパン密集地域を事例として—」である。チョッパン地域（無認可簡易宿泊所）とは、月賦または日払いで、0.5 から 2 坪前後の面積で炊事・洗面・トイレなどが適切に備わっていない住居空間である。松下氏はソウル市内にある 2 つの

チョッパン密集地域を対象としたアンケート調査および、インタビュー調査を行った。それらの調査はそれぞれ、2021年、2022年、つまり新型コロナウイルスの終息の見通しが立たない中で行われた。韓国への入国制限がある中、いつでも調査開始できるよう準備した。結果的にアンケート調査を現地の団体に委託したが、インタビュー調査は現地で行うことができた。だが、地域内の事情を昔から知る人物の多くは高齢者である。密集地域の感染拡大が懸念される中、そういった人物へのインタビュー調査を控えざるを得なかった点は調査の限界として挙げられた。

劉鵬瑤（東洋大学）は、「グレーザーの継続的比較分析法に基づく分析および論文作成の過程について」というテーマで報告した。劉氏は中国都市部社区（地域）網格化管理制度の実践者である網格長（行政的代理人）6名の活動に焦点を当てた調査から、質的調査の分析過程を語った。その分析方法は、グレーザーの継続比較分析法、補足すれば、研究者自身が実践現場に入り込み、その現場からたたき上げる理論、仮説で実践を説明する者である。そのため、分析するにあたってデータとの対話が大事である。だが、中国語のデータを日本語に翻訳、コーティングすることは非常に時間のかかる作業であった。また、カテゴリー化のプロセスで、先入観によりコア概念がみえてこなかったため、最初からやり直したという経験を語った。

質疑応答において参加者から、災害福祉の連携の詳細、ソーシャルワーク実習教育の評価と文部科学省から出された実習目的との違いおよび、評価はどこまで発展していくか、質問項目の妥当性の検討の詳細などに関する質問があった。質問に対して、報告者から回答または提案がなされた。質問応答の後、孔栄鐘氏（佛教大学）より総括をいただき、同会場での名刺交換&交流会が開催された。With コロナが推進されている中、懇親会ではなく、今回のような飲食なしの交流会は参加者同士の交流を図るための有用な方法の一つとして考えられる。

今回の情報交換会で報告された4名の方は留学経験、そして母国語以外の言語での調査実施、論文執筆に取り組まれてきた。それぞれのアイデンティティ、そして報告内容は当日参加された方の参考になれたのではないかと思っている。

最後に、第52回若手研究者・院生情報交換会が無事閉会できたのは、開催にあたり先生方、学会会員および関係者の皆様のご協力の賜物である。心よりお礼申し上げます。

以上